

ま・な・び 記録帳

『萩の夏みかんについて』

◆夏みかんの魅力に迫る

はじめに夏みかんの学名は、シトラス・ナツダイダイ・ハヤタ (Citrus Natsudaidai Hayata) と云ります。これは、大正八年（一九一九）に早田文藏博士が新種として発表しましたことに由来します。：：：ということは、日本原産種という扱いになるわけですが、このストーリーが面白いです。夏みかんの原樹は、山口県長門市大日比（青海島）の西本家にあります。江戸時代中

「夏みかんと土壌」という
景色を気に入つて、旅行に来
れば必ずその景観を求めては
写真に収めてきました。それ
は萩に越してからも変わらず、
折に触れて目を楽しませても
らっています。今回は、萩博
物館で開催された企画展「萩
の夏みかん物語り」の展示か
ら、夏みかんの魅力に迫つて
いくことにします。

◆夏みかんを広めた人物
明治時代の初期、萩藩の士族たちは生活に困窮していくました。それは、江戸時代末の藩庁の山口移転に続き、明治維新・廢藩置県によって、萩は政治・経済の中心ではなくなってしまい、藩の重臣たちはこの地を離れ、また萩に残った士族たちは、禄（給料）



期の一八世紀に、近くの海岸に流れ着いた見たことのないミカンの種子をまいて育てたものといわれています。それはアジアのどこかが原産ということになりますが、はつきりしないために日本の名称が学名になつたのです。なんだか不思議ですね。ちなみにこの夏みかん原樹は、昭和二年（一九二七）四月八日に国指定史跡及び天然記念物に指定されています。

全国で初めて、夏みかん栽培に取り組んだ小幡高政（文化一四年（一八一七）～明治三九（一九〇六））は、「夏みかん栽培の父」といわれます。彼は、周囲の冷ややかなまなざしを感じながらも、自らも率先して邸宅（現在の田中義一別邸）周りの屋敷地（現在のかんきつ公園）にも夏みかんを植えていきました。



甘い香りを漂
わせる白い花

んの苗木を大量に生産して栽培を推奨します。彼は、もともと武家屋敷地にも植えられていて、あまり手をかけなくとも実る夏みかんを、主の居なくなつた広い武家屋敷地に植えて、大々的に栽培しようとしたのでした。

こうした状況を見かねて、明治九年（一八七六）、長州藩の役人小幡高政（おばたたかまさ）が、生活に困っている士族救済のために「耐久社」という団体を設立し、夏みか

城下町のあちこちで見かける 夏みかんと土堀の風景

ところが、夏みかん栽培は一九七〇年頃を境に衰退していきます。その頃までは、栽培の夏みかんは鉄道を使って遠くは北海道や東北まで全国各地へ出荷されていましたが、ミカンの仲間が出回るようになって、次第に生産が減つていくこととなつたのです。

たそうです。なんと、明治三〇（四〇年代（今から一〇〇年以前）には、当時の萩町の年間予算の八倍もの生産額を誇っていました。

◆黄金の果実・夏みかん
栽培から十年程たつ頃には、旧萩城下の空き地のほとんどに夏みかんが植えられ、出荷量も相当なものとなりま

◆黄金の果実・夏みかん

◆夏みかんあつての萩

萩博物館はとても楽しい
のにや！（萩にやん。）

このように、萩の経済を主
え、景観を形成してきた功績を
を知ると、「夏みかんといえど
萩」というよりは「夏みかん
あつての萩」と述べるべきを
と思えてくるものです。

ことがなく、「江戸時代の地図」が使えるまち」、「土壇と夏の持形成に大きな役割を果たしたといえます。

屋敷地の区画も大きく変わった

しかし、明治期から昭和中期までの間、夏みかんが高価で取引され続けたことで、夏みかんの木が植えられた畠は風から守るための土壙や長巻などとともに維持・管理さ

夏みかん栽培が衰退してしまったのは残念ですが、時代の流れもあり、仕方のないことだと思います。